

〈特別寄稿〉

国際交流 その視点と可能性

図 師 照 幸

はじめに

こんにちは。ただいま、身に余るご紹介をいただきまして、とても恥ずかしく思っています。研究所の図師と申します。

ご紹介いただきましたように、私は英国のロンドンで生活しております。この3月末で丁度20年過ごしたことになり、21年目に入ったところでございます。今、先生方にご紹介をいただきましたような立派な人間ではありませんで、国際教育を中心としたささやかな活動をしているわけでありませう。

本日はみなさんの貴重な時間をいただきまして、英国における活動を通して常々考えておりますところの、拙い思いではありますが、そういった話をさせていただきますと思っています。

たとえば、私には子どもが3人おりまして、その子どもたちを英国で育てた経験等も踏まえて、具体的なお話をさせていただきたいと思っております。

それでは、本日のテーマとして掲げました「国際交流 その視点と可能性」といったこととお話を進めて参りたいと思います。いくつかの観点からお話を組み立てていきたいと思いますが、国際交流といったものがどのようなものとして位置づけられなければならないのか、あるいは国際交流といったものが私たちの人間の社会においてどんな可能性を持っているかといったことについてお話をしていきたいと思っております。

イギリスにおけるホスピタリティー

はじめに、何年前かに実際に経験したのですが、ある方からご相談を受けました。東北に住むある女子大生の留学の相談でした。

その女子大生は全盲でして、全く目が見えなかった。その彼女が「他のクラスメートと同じように、自分も海外に行って英語の勉強がしてみたい。海外に留学してみたい」という願いを持っているというのでした。色々な教育機関に相談をしたけれども全く目が見えない学生を預かってくれる学校も、あるいはホームステイを引き受けてくれる所もないので困っているということでした。

その話を聞いて、「じゃ、私の所で引き受けましょう」ということで、その彼女を受け入れることになりました。夏休みのほぼ1カ月という短い期間ではありますが、彼女を引き受けるという回答をした後に、彼女を引き受けてくれるホームステイ先がなかなかないということで苦労をすることになりました。何とかホームステイ先を見つけ、空港にスタッフの1人を迎えに行かせ、ホームステイ先まで連れて行かせました。それから毎朝迎えに行くスタッフとともにバスを使って私どもの学校に英語を勉強しにくる彼女の生活が始まったわけです。

他の学生と一緒に一生懸命英語の勉強をしていたわけですが、ある朝、スタッフミーティングにおいて、英国人の先生から、「今日は学生をナショナルギャラリーに連れて行く予定です」との報告を受けました。ナショナルギャラリーというのはその名の通り、ロンドンにある英国の国立美術館です。そのとても大きな、フランス・パリのルーブル美術館に勝るとも劣らない立派な美術館に、その学生たちを、英語の学習の一環として連れていくことにしているというのです。

「そのクラスには彼女がいるんじゃないんですか」と訊ねますと、「います」との応え。「全く目が見えない彼女を美術館に連れて行っても大丈夫ですか」とさらに訊ねました。そうすると、その英国人の英語の先生は「大丈夫だと思います」と言うんですね。その前にもミュージカルを観に行くということで、その学生は観劇に参加しているわけですが、ミュージカルの場合には演奏や歌が流れて、それを聞けばいいわけですからまあいいだろうと思ったわけですが、美術館ということになりますと、目が見えない人にとってどんなふうにして、美術館を体験するのかといったことで心配をしたわけです。

美術館の見学が終わって、研究所に戻ったその英国人の先生が私に報告に来ました。

「どうでしたか」

「前もってこういう学生が勉強の一環として美術館に参りますと連絡はしておいたわけですが、美術館では彼女だけのためにスタッフ一人が待っていてくれました。そして、作品の前に連れて行っては、〈今、あなたが面しているのはゴッホの絵の前です〉〈今、あなたが立っている所はピカソのこういう絵で、こういう絵を描いています〉と説明をしてくれました」

「ずっと、付きっきりで、ですか」

「はい。美術館の専門家で、学者の一人であるその方が、できるかぎり分

かりやすい英語で彼女のために説明をしてくれました」

「言葉に対する配慮もしてくれましたか」

「はい、そうなのです。さらに、〈これを付けなさい〉と言って、特別な手袋のようなものを付けさせて、立体（スカルプチャー）の作品に触らせてくれて、〈これは何という作家の作品で、タイトルは何々ですよ〉と説明してくれていました」

その話を聞きまして私は、感動というか、大きな衝撃を受けました。もしも私たちの愛すべき日本という国に、どこかの国から、全盲の学生が、夏休みだけ、少しでも日本語を勉強したいというような学生がやってきたいと望んでいたとして、それをこのような形で受け入れることが果たして可能なんだろうかという気がしたのです。

同じ人間として

皆さんもご存知かと思いますが、イギリスにはたくさんの留学生がやってきて、いろいろな国の学生たちが学んでいます。たとえば、私の研究所で学んでいるある学生の場合、彼女は2人の小学生の子どもの母親でして、その子どもたちを連れて3人で日本からロンドンにやってきました。研究所の大学院日本語教育学研究科の修士課程の学生です。彼女はロンドンに着くとすぐ、現地の公立小学校に向向いて行って、その子たちを学校に入れてくれなにかと頼みました。そして今、その子どもたちはその学校で、現地の子どもたちと一緒に勉強をしています。

もちろんすべて無料です。たとえば、学校で怪我をしたり、それどころか大きな怪我をして入院するようなことがあったとしても、入院の費用等は全て無料です。

イギリスという社会も、いろいろな多くの重大な問題も持っています。ご存じのようにクラス社会でありまして、身分制度が未だ残っていると言ってもいいぐらいに、様々な格差があります。しかしながら、たとえばイミグレーションを通して、入国審査を通過して、その国に受け入れた人間に対しては、私たち、つまり英国の人たちの、自分たちと同じ人間であるんだという、基本的な人間としての権利といったものについては、それを守るのは当たり前だという考え方を持っているんです。

もちろんそういったものを逆に利用して、最近では、経済的に非常に苦しい国の方から出産間近の女性が何とか英国に入ってきて、空港から真っ直ぐ

公的な病院に駆けつけて、そこで出産をする。つまり、ただで出産して、子どもを産んで、そういう人たちの増加が問題にもなっています。そうやって英国の中で子どもを産みますと、その子が大人になるまでは英国籍を与えることになります。つまり、生まれた子は英国人になるわけです。その家族が貧しく、生活ができないということであるならば、家があてがわれ、最低の生活ができる費用を負担してくれる。それだけではなく、親が仕事につけるようになるための職業訓練や英語の学習まで無料でさせてくれるのです。そういうものがあるが故に、いろいろな国からそういう形で入ってくる人たちが増えているのです。

そういったことが最近では問題として指摘されるようになってきてはいますが、表面的な現象は別として、私たちはどうでしょう。たとえば日本という国に他の国の人たちが入ってきた場合に、あるいは日本という国で短い、長いを問わず生活をするようになる。そういった時に、その人を、その一人ひとりの人間を私たちと同じ人間であると受け入れることができるかどうか。国やいろいろなものを超えた人権、人権というと、問題や活動といったものが連想されるところがあるかも知れませんが、そういうことではなくて、私たちと同じ人間なんだという受け入れ方ができるかどうかといったことが大切なことではないかと思います。

見えないものを見ようとするまなざし

先ほど、ナショナルギャラリーという例を出しましたが、ブリティッシュミュージアム（大英博物館）、あるいはその他のたくさんの博物館や美術館といったものがほとんど無料で開放されています。ほとんどのそういった公的な機関はただで入場することができます。ですから、お金がなくてもそういった所で日曜日や土曜日の空いた時間を過ごすことができます。あるいはまた、ほとんどのヨーロッパの都市は、大都市の中に緑豊かな、大きな公園をいくつも持っています。公園の中で一日を過ごす人たちもたくさんいるわけです。そういった生活の様子を見ていますと、お金を使わなくても、いわゆる文化的な、あるいは健全な環境に身を置くことができるということは羨ましいなと思います。衣食住という言葉がありますが、私たちが生きていく上で必要なものは衣食住だけではなく、他に文化や芸術といったものが実は衣食住といったものと同じくらい大切なんだといった考え方が、古い歴史の国、日本もそうですが、本来あったのではないかと思いますが、そういった

ものが今でもなお、英国にはきちんと存在しているような気がします。

私たちは障害を持っていなければ、多くの場合、普通に歩くことができるわけですが、私たちが歩くために必要な道幅といったものは、お酒に酔って千鳥足でもない限り、幅1、2mもあれば十分です。しかしながら、もしも私たちが歩いていく道幅が実際に1mや2mの幅しかなかったとして、その両脇が断崖絶壁であったとすると、私たちはきっと足がすくんでなかなか前に歩いていくことはできないのではないかと思います。

私たちは私たちが踏みしめている大地だけでは生きていけない。私たちが踏みしめる大地を、踏みしめない大地が支えていて初めて、安心して前に進むことができるのです。しかし、踏みしめる大地のことしか見えなくなってしまうのが、日常的な生活ではないかという気がします。私たちにとって大切なものは、見えるもの、計(量)れるものだけではないんだということを認識しなければならないと思います。例えば、今日のお話の指針となるところの国際交流や異文化の視点といったもの、いわゆるまなざしといった視点にそういったものが大切なのではないかと思います。

アイデンティティとは

私には3人の子どもがおりまして、子どもと言いましても今年で27歳、26歳、そして23歳になる子どもです。一番目の子が幼稚園を卒園する時、つまり小学校1年生になろうとする春に英国に連れていったわけです。

先ほど申し上げたように、英国に着くとすぐに長男と次男を現地の学校に入れました。娘はまだ2歳で小さかったからです。その学校はその時、初めて日本人を受け入れたのでした。今、大いに反省するところもあるわけですが、その頃の私はまったくの仕事人間でした。日本にいる時から、外では教育について話したり、いろいろな保護者の人たちの会や先生たちの会で講演したり指導したりして、教育とは、あるいは家庭において親というのはこういうことをしなくてはいけないと言いながら、私自身はほとんど自分の子どもの世話をすることもできないような状態だったわけです。

子どもたちはその時、アルファベットの存在も全く知らなかったのです。その子どもたちをいきなり、英語しか通じない学校に入れたわけです。しばらく経って、子どもたちがその学校で書いた英語の作文で、その頃の学校生活のことを知るようになるわけですが、長男はこういった作文を残していません。

学校に行っても何も分からない。先生やクラスメートが何を言っているかが全く分からないのです。その空間で、彼は一日中、机に向かって座っているわけです。ある日、英国へ来て間もないときですが、学校でおしっこがしたくなった。トイレに行きたくなった。しかし、トイレがどこにあるのかを聞く英語力ももちろんない。どうしよう。次の休み時間まで我慢しよう。何とか我慢を続けようとした彼も、もう我慢できなくなった。それで、本当にどうしようもできなくて、もう駄目だと思ったときに、彼はハッとしたんだそうです。きっと休み時間にトイレに行きたくなるのは自分だけではない、とそう思ったんですね。周りを必死の思いで見回しました。休み時間になって席を立った、きっとあの子はトイレに行くんじゃないかなと思って、その子の後について行った。そして、そこにトイレがあった。といったところから学校生活が始まっているわけです。それからずっと英国で英国の教育を受けさせていただいて、今、大学や大学院で研究したり、大学で英語を教えたりしているのです。

私は多忙を言い訳にして、子どもたちと接する時間が非常に短いんです。その上に、教師という仕事をしていますと、家に帰って、家で子どもたちと話をする時をつい、「先生はね」と言ってしまったりすることがありますが、子どもに対しても教師のような話し方しかできなかった感じがするんです。家には教師は必要なかった、とそう反省もしています。

ある日、次男と話をしていた、彼も向こうで生活しているわけですが、次のようなことを突然、彼が言ったんです。「ぼくはね、パパ、日本という国籍、ナショナリティといったものなんだけれど、このままジャパニーズを続けなくてもいいかな」と、そう言ったんです。つまり、自分は今、そしてこれからも日本人という国籍をそれほど必要とはしないというふうに言ったんです。

これにはうろたえました。いろいろなグローバルな考え方やいろいろな価値観の中で一つのものにこだわることなく、これからは生きていかなくはいけないんだという話を盛んに言っていた私が、「自分は別にジャパニーズというナショナリティでなくてもよい」という子どもの言葉でうろたえたんです。

「どうして？ 日本人であることが嫌なの？」と訊きましたら、「日本という国は大好きだよ。日本人であるということに誇りも持っている。しかしながら、別にジャパニーズだという肩書きは要らない。今、自分はイギリス

で生活をしていて、これからもヨーロッパを中心としたいろいろな国で仕事をしていく過程において、ジャパニーズでなければならないという意味はない」というふうに言ったわけです。

私たちは最近、アイデンティティという言葉を日本語の中でもよく使ったりしますけれども、このアイデンティティというものは一体何なのかということ息子から突きつけられたわけです。

たとえば、私の子どもは日本で生まれて、日本人という国籍を持ってイギリスにやってきたわけですが、ファーストランゲージという意味では、最初に身に付けた言語環境は日本語だったわけですが、今や彼ら、子どもたちの生活を支える言語は日本語ではなく英語の方が、明らかに彼らの生活の言語になっているわけで、言語学でいうところのファーストランゲージあるいは母語になっているわけです。さらに宗教ということになりますと、私の凶師という家は武士の家で神道になりますが、彼らにはほとんどそれは何も意味をなさない。彼は一体何なのか、ぼくは一体どんな形でぼくであることを証明すればよいのかということになるわけですが、アイデンティティ、すなわちその人間はどうやって、あるいはここにいらっしゃる皆さんは、ご自身が、私が私であることは一体どんなふうにして証明することができるのかというふうと考えてみると、一体どんな枠組みを設定していかれることになるのでしょうか。

はっとしながら、それに対して、まともな回答を未だなしえないまま、いろいろ考え続けています。私は、いろいろな格好いいことを講演会などでお話ししながら、やはり正直に、自分の息子が、あるいは自分の子どもたちが国籍を変えるということ大きな衝撃をもって受け止めたのでした。

イギリスの家庭で使用する言語の数

こういったことを経験しました。九州のある県で幼稚園を経営されている方がいます。その幼稚園は国際的な知識を園児に身に付けさせるという教育方針を持っておられるとのことでした。つまり、国際人養成を謳った幼稚園です。その園長さんのお嬢さんが英国に留学してきました。留学してきたお嬢さんのホームステイ先を研究所のアコモデーション・デパートメントのスタッフが紹介したわけですが、すぐに日本のその園長先生から抗議の電話があったのです。

「私の娘はちゃんとイギリス人の家にホームステイさせてくれるはずじゃ

なかったのか」

「ええ、イギリス人です」

「何を言っているんだ。娘のホームステイ先は黒人の家じゃないか」

「ええ。しかし、イギリス人です」

「冗談じゃない。普通のイギリス人の家に変えてくれ」

これは、国際的な意識を子どもたちに身に付けさせようという教育方針を持った幼稚園の園長先生の言葉です。

イギリス人にはいろいろな人たちがいます。皆さんの中にも旅行をされた時に、たとえば、ロンドンの町の中で明らかにこの人は現地の人だなどという人に道を尋ねられたことのある方がいらっしゃるのではないかと思います。私などはよく尋ねられます。ロンドンの町を歩いていて、イギリス人に、どこどこに行くにはどう行ったらいいかと尋ねられるのです。どう見たって私はアジアの人間ですが、こういったアジアの顔をしたイギリス人も黒い肌のイギリス人も、いろいろな人たちがいるわけです。白人だけがイギリス人ではなく、そんなことを口にしたらそれだけで犯罪になります。国際的な意識を子どもたちに身に付けさせようという教育方針を持った幼稚園の園長先生はまずは自らその意識を変えなければなりません。

たとえば、ここに示した184とは何を表す数字かわかりますか。これはロンドンの小学校で学ぶ子どもたちがそれぞれ自分の家庭で使用する言語の種類の数です。イギリスの学校ですから学校では英語で授業を受けるわけです。ところが、その子どもが家に帰って、お父さんやお母さんたちと話をするときの言葉の種類、それが184種類あるという調査の結果です。それだけたくさんの言葉が生活言語として使われている、それだけたくさんの言葉を母なるものとして持っている人たちが生活をしている。

日本とイギリスは島国で同じような国だと言ったりする方がよくいますが、全く違うということが言えるのではないのでしょうか。さまざまな言語や人種で構成されるイギリスと、ほとんどの人が日本語だけで生活し、ほとんどの人が日本人であり、ほとんどの人が日本は単一民族からなっていると錯覚している日本、同じ島国でも大きな違いがあります。

イギリスはヨーロッパの島国ですが、イギリス人というのは非常に面白いとか、生意気なとか、あるいは傲慢など言ってもいいと思いますが、イギリスの人にホリデイの前に「休みはどこに行くの」と訊きますと、「うん、自分はヨーロッパに行く」という応えが帰ってくる場合があります。変だな

と思って、「イギリスだってヨーロッパじゃないか」というようなことを言いますと、「いや、イギリスはヨーロッパではない。イギリスはヨーロッパや何々という枠組みの1つにはならないんだよ。イギリスはイギリス以外のなにものでもない」と。何と傲慢な国だろうと思ったものです。

イギリスのロンドンではこういったたくさんの言葉や、すなわち文化を持った人たちが生活をしています。そこで様々な価値観というものがあるがぶつかり合っていて、そしていろいろなことに揉まれながら生活をしています。

戦争にはいいも悪いもない

私の子どもが小さい時のことです。学校から帰ってきて、非常に憤っていることがありました。どうしたのと訊くと、今日の「歴史」の授業で、日本という国が一体どんな国であったかということについて、先生が「日本という国は悪い」といった内容の授業をした。戦争の時のことです。息子は日本人として、その教室に居て、そんなことはない、日本だけが悪かったわけではないという思いを持って憤ったわけです。皆さんはご存知かどうか分かりませんが、イギリスには「VJ Day」という日があります。「VJ Day」というのは日本に勝った日をお祝いする祭典なんです。戦闘機を飛ばしたり、すごく華やかな行進をしたりして、日本に勝った日をお祝いするお祭りです。たまたまその日に日本から観光でやってきた人たちの中には、何もわからないで、パレードに手を振ったりしている人もいるわけですが、戦争に勝ったということを未だにお祝いしたりして、子どもたちが憤りたくなるのもわかります。

こんなこともありました。ある夜、私はロンドン市内のシーフードのお店で食事をしていました。よく行くお店なのですが、私の隣のテーブルに、これはロンドンではなくてイギリスの田舎から、お上りさんとしてやってきたと思われる英国人の老夫婦がいました。その老紳士から、「ロンドンにはこのようなお店が幾つもあるのでしょうかねえ。このお店のようにおいしいお店を他にどこか知っていますか？」と尋ねられました。そこで、いくつか教えてあげたのですが、しばらくして再度、その老紳士から、「あなたは日本人か」と訊かれました。「はい、日本人です」と応えたら、少しお酒を召し上がったその紳士が突然、「どうしてパールハーバー（真珠湾）を攻撃したんだ」と言い始めたのです。これは最近のことですけれども、その瞬間、レストランが不思議な静けさに包まれました。「どうしてパールハーバーを攻

撃したんだ」と私に訊かれても困るわけですが、その老紳士はそういうことを日本がやったからあの悲惨な戦争が始まったんだ、と言いたいようです。私は「戦争にいいも悪いもないだろう」と論争というほど派手なものではありませんでしたけれども、望まない言い争いをしてしまうことになったのでした。

国際交流の意味

私たちは、国際交流、国際理解、あるいは教育に関われば国際理解教育、異文化間理解教育などといった言い方をしますが、それを仕事として、あるいはボランティアとして、あるいは研究の対象として関わっておられる方がこの会場にはたくさんいらっしゃると思います。私は他の県でも、県の教育委員会や国際交流推進課などに招いていただき、先生たちを対象としてお話をすることが時々ありますが、一体国際交流というのは何のためにするのか、しておられるのか。どこの都道府県にもそういうセンター等がありますが、大体同じような活動がなされているのではないかと思います。しかし、一体何のために、国際交流あるいは教育の世界で言えば国際理解教育といったものがあるんだろうと考えます。皆さんにこういう問いかけをすることは極めて失礼なことかも知れませんが、しかし私たちは時に自分が取り組んでいることが一体どんな意味があるのかといったことについて、立ち止まって考えてみる必要があるのではないかと思います。

私は国際理解や異文化理解、国際交流の基となる、こういったことについて、まず考えなければいけないことは、〈異なるということについての理解〉。これはかなりの人たちが今、口にするようになってきていると思いますが、平たく言えば、一人ひとり違うんだということです。学生や若者でいいかげんな生活をしている者に、大人や周りの者が注意した時、「いいじゃないか、勝手じゃないか。何をしたって自分の人生だ」と居直ってみたりする若者がいますが、それは全くの勘違いです。一人ひとり違うということの履き違えですね。

しかし、やはり、一人ひとり、例えば男と女、日本人とイギリス人、男同士であっても兄弟であっても、一人ひとり異なるわけであります。そのことをまずよく理解しなければいけないということです。

2つ目は、その理解について、異なる事柄についての正確な認識をしなければいけない。これはとても難しいと思うんです。正確に認識をする。

皆さんの中には「外国人というものは」というものすごく大きな括り方をしている方もいらっしゃるかもしれません。「イギリス人は」というのもこれも大きなもので、イギリスと言っても、多くの方が考えているのはイングランドであり、英国にはその他にスコットランドやウェールズ、あるいは北アイルランドといろいろあるわけで、言葉等も完全に違っています。正確に認識するというのはとても力がある。そこで国際理解教育や異文化間理解教育においては、正確に認識する力の養成がその目的になってくるわけです。

そして最後になりますが、国際交流にしても国際理解、異文化間理解であろうが、最近はグローバルエジュケーション、地球教育といたりするわけですが、ここで、すなわちただ違いを認識するだけで終わってしまうならば、異文化理解といったものは余り意味がない。たとえば、イギリス人が日本のなものを勉強して、学んで、触れ合って、こういう島国においてはこんなことをやるのか、面白いな、珍しいな、で終わってしまうのであるならば大した意味はないというふうに私は考えます。

実は、その先に私たちが求めるべきものがあるのではないかと思います。異なる事柄に見出す人間存在に関わる不変的な価値。イギリスで生まれて、イギリスで育って、イギリスで生活しているだけでは分からないもの、手に入れることができないものがあるとします。それがたとえば日本という国にあったとします。逆に、日本で生まれて、日本で育って、日本で生活しているだけでは見えないもの、わからないもの、手に入れることができないようなものの見方、まなざしということばを使ってもいいと思いますが、そういうまなざしといったものがあるとするならば、そしてそれを手に入れて生活するようになったとするならば、その人がそれで幸せになるとするならば、それはとても意味があるのではないかと思うのです。

普遍的な価値とは

私たちは小さい頃から段々大人になっていく過程において、たとえば今、皆さんは生活をされているわけですが、自分の周りにどンドンどンドン自分の愛する人、好きな人が増えていっているのか。それとも嫌だな、嫌いだなという人が増えていっているのか。当然のことながら自分の周りに愛する人たちが増えていの方が幸せであるわけです。しかしながら、なぜか大人になるにつれて、人を嫌いになったり、人の悪口ばかり言うようになってしまったりしてしまうとするならば、その人は不幸な人生を送っていることになります。「嫌

だな、あの人は嫌いだな」と思っている人、しかし、そこでたとえば欧米の少し見方の違う、立場の違う視点を手に入れることによって、嫌いだった人が、「いや待てよ、彼はこういういいところがあるんじゃないか。今まで嫌いだったものというのは、自分の独りよがりだったかも知れないな」というふうに見方が変わったり、嫌いだったものが嫌いでなくなったり、もっと言えば好きになったりするならば、それは大変な力を手に入れたことになりま

す。

私たちが異なった価値観や歴史や文化や伝統や生活習慣等から学ばなければならぬものというのは、結果的にはそういうまなざしではないかと思えます。国際交流をすることによって、あるいは外国の方が日本にやってきて、高知にやってきて生活をしながら何を獲得するかというと、単なるスキルや技術と言われるようなものだけではなくて、大切なものはそれだけではなくて、「日本の」という大きな括り方でなくてもいいわけですが、この高知の、あるいは地域の人たちのささやかな生活の仕方や、ささやかな自然に対する思い等を吸収することによって、その人が新たな力を手にすることになったとしたら、それが大きなものではないかと思えます。つまり、どこの国の人であったとしても、その力を獲得することによって、その人が幸せになるというのが、いわゆる普遍的な価値と私は呼んでいますが、それがあって初めて意味があることになります。

しかし、それはとても怖いことでもあるんです。つまり、今のようなグローバルな社会になってきた時に、国と国とが向き合っていた時に、日本というものが持っているものが、世界的に、あるいは人類の、人間存在に関わる普遍的な価値とは認められなくなれば、それは恐らく消えていきます。

自分たちの、つまり日本人にとってだけ意味のあるようなものというのは、実はこれから少しずつ消えていくんです。自分たちだけの幸せを考えると、それにしがみついていると、それは消えていきます。国際理解や異文化理解というのは、異なるものを正確に理解し、異なるものの中に人間存在に関わる普遍的な価値を見出そうとする力。私はそれを〈知性〉と呼んでいます。知性というのは冷たいものではない。人と繋がろうとするものです。コミュニケーションして、その人を理解しようとする。その人をできるならば愛することができるような、そういう力が〈知性〉と言われるものです。獲得した力でもって、国際経済競争力に打ち勝っていくんだというようなものは、単なる表面的なスキルに過ぎないと思えます。

異なった価値観によるまなざし

日本に戻ってまいりまして何が面白いかというと、テレビの国会中継ですね。国会議員のやりとりはどんなコメディイを見るよりも面白い。論理を完全に無視したまま続いているんです。ただ今回、日本の首相が突然辞めたことはイギリスの新聞でも大きく報じられたわけですが、海外で日本人としての誇りを持ち、日本が大好きなのですが、今回の件は正直言ってとても恥ずかしく思いました。英国の新聞では「コメディイ」という言葉が使われていました。経済的には大きな国になっているが、基本的には文化的な、知的なレベルにおいては劣った国だ、というような報道がなされていたことに、非常に恥ずかしい思いがしました。これからいろいろな意味で国際政治のあり方についても考えていかなければいけないのではないかと思います。

たとえば、平和といったものが一国の平和だけで存在するわけではなくて、世界の平和としてしか存在しない。人権といったものが自分たちだけがよければいいというような、そういうものではないということですね。

ある日、白タクに毛が生えたような、英国で言うところのいわゆるミニキャブに乗りました。その運転手の運転がどうしたわけか乱暴だったんです。話を訊くところでは、その運転手は移民として英国にやってきた人でした。非常に怒っていたので、「どうしたの」と訊きましたら、「アメリカはたくさん自分の国の国民を殺しておいて、アメリカ人が一人や二人死ぬと大変なことになるじゃないか。我々の命とアメリカ人の命は違うのか」と憤っていました。なかなか難しい問題であるにしても、ただどんなことであつたとしても、人の命は等しく尊いものです。その意味から、私は彼に同意しました。

数年前のことです。私たちの組織が日本の小学生を対象に作文コンクールをやりました時に、最終審査に残ったものを読ませてもらいました。その中にこういったものがありました。

「私は戦争は嫌いです。私の友達もみんな戦争は嫌いです。恐らく他の国の子どもたちもみんな戦争が嫌いだと思います。なのに、どうして大人になると戦争をすることができるようになるのでしょうか。」

確かに不思議ですね。私たちは子どものころ、周りの大人の人たちから、学校の先生も含めて、「一生懸命勉強して立派な大人にならなきゃ駄目だよ」とよく励まされます。

私にもいつも不思議だなと思っている言葉があります。「あの子は勉強で

きるんだけど、自分のことしか考えない」とか、「あの子は勉強はできないんだけど、気持ちの優しい良い子だ」とかいった言葉です。

これはおかしいですよ。少なくとも〈教育〉という仕事に従事している人たちにとってはこれは敗北ですよ。つまり、「一生懸命勉強して立派な人間になりなさい」と、周りの大人やお父さんやお母さんやおじさんやおばさんや学校の先生が励まし指導して、その言葉通りに一生懸命勉強した人は、誰よりも人の心のわかる、思いやりのある優しい人間になっていなければならない。こういう人のことを立派な人間と言うんですよ。

ところが、いい成績を取って、一生懸命勉強した子どもが、自分のことしか考えない、逆に、勉強しなかった成績の悪い子が優しい人間であったとするならば、それはどこが間違っているのか。そのシステムが、勉強させている内容や勉強のさせ方がまずい、そういうことです。

そして恐らく、戦争といったものを正当化していくのは、世界のどの国においても、その国のトップレベルの人たちです。エリート中のエリートの人たちが戦争を肯定する。一生懸命勉強して立派な人間になったはずの人たちが戦争を肯定しているのです。そういったことを思いますと、私たちはもっともっと、皆さんが今、一生懸命取り組んでおられる国際交流もそうですが、いろいろな異なったもの、異なった価値観に対する大きくやわらかなまなざしといったものを吸収して、本来の知性というものを手に入れて、いろいろな面から見直しを図っていかなければいけないと思います。

心の中にある平和の砦

ここに示したものは1946年のユネスコ憲章の前文にある言葉です。

「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和の砦を築かなければならない。」

これが皆さんが恐らく関わっておられるものの、最も目指すものではないか。心の砦。平和というのはお互いを理解する。認め合って、そして愛し合うことができるような力を手に入れる。皆さんが関わっておられる国際交流、あるいは様々な国際理解といったものは、一人ひとりを幸せにすることなんです。そのために、たとえば高知というこの土地で一体どんなことができるのか。海外からやってきた人たちが、ここで吸収する人間存在に関わる普遍的な価値とは一体何だろうと、皆さん自身がお考えになる時に来ているのではないかと思います。普遍的価値とは何だろう。私たち日本人が持っていて、

そして私たち日本人が他の国の人たちのまなざしと言ったものに貢献できる価値というのは何だろうといったことを、繰り返し、立ち止まって考えていかなければいけないのではないかと思います。

海外における不思議な日本紹介

皆さんが関わっておられる国際交流といったものについて、私もこの講演を引き受けまして、いろいろなことを考えました。これは日本に対する批判ということになるのかもわかりませんが、たとえば英国においては10年おきにジャパン・フェスティバルというものが開かれます。ジャパン・フェスティバルと交替で英国フェアが日本でも開かれます。ジャパン・フェスティバルにおいて、日本という国や政府関係の方々が日本というものを紹介する時に使うマテリアルは、流鏝馬や歌舞伎、あるいは浄瑠璃、そういったものが中心です。それらが英国の社会に「これが日本だ」と紹介されるわけです。

しかし、ここにいらっしゃる皆さんで、流鏝馬をご覧になった方、あるいは実際に歌舞伎をご覧になった方は、そう多くはないんじゃないかなという気もするんですね。しかし、未だに日本というものを海外で紹介する時には、そういったものが前面に出てくるんです。歌舞伎は極めて大切な、日本という国が大切に守ってきた伝統的なものですが、日本という国はただそれだけではないんですよ。

私たち日本人というのは一体どのようなものを以って、先ほどのアイデンティティではありませんが、日本人であるのか、どんなところが日本人なんでしょうか。随分と世界中がアメリカナイズされており、イギリスという国もこの20年の間に随分アメリカナイズされてきています。ロンドン市内の喫茶店みたいなもの、元々喫茶店みたいなものはなかったのですが、喫茶店もたくさん出てきていまして、随分アメリカナイズされてきて、いいことも悪いこともあるわけです。

日本人というのは一体何を以って日本人というのか。日本の文化としてお茶やお琴、そういったものが盛んに紹介されるわけですが、皆さんはどれくらいお抹茶を自分で点てて日常的に味わっておられるかということ、そんなに多くの方が日常的に取り入れてはいないと思うんですね。しかし、そういったものが紹介されますと、向こうの子どもたちや日本に関心を持っている人たちは、「日本人はこうやってお茶を飲むのか」というふうに思ったりするんです。

イギリスではあまり知られていない日本

未だに国際的な仕事をしている人であっても、大きな勘違いをしている人はたくさんいます。日本人は日本のことをみんなよく知っていてくれるだろうと思ってられるかも知れませんが、ちょっと前、10年ぐらい前になりますが、ケンブリッジ大学で私が仕事をしている時に、ケンブリッジ大学の先生と2人で日本にやって参りまして講演をしたことがあります。その方は色々な国々、アジアやアフリカを回ってこられた方ですが、日本はその時が初めてだったんです。非常に知的な方ではありましたが、その方と一緒に日本にやって参りまして、当時の文部省の関係の人たちと会議をしたり全国で講演をしたりしながらいろいろな都市を訪れました。そして最後に、京都で、極めて伝統的な京都らしい旅館に泊まったんです。最初は「フロアに寝るのか」と畳を指差してビックリしていました。

食事をしてゆったりとしたところで、「実は私はお土産を持ってきていたんだ。いろんな方に会わなければいけないから、イギリスからお土産を持ってきていたんだけど」と言われて「せっかく持ってきたんだったらどうしてそれを渡さなかったの」と訊きますと、「いや、渡せなかった」と言うのです。「せっかく持ってきたんだからあげたら喜ばれたのに」と言う「いや、出せなかった」と恥ずかしそうに応えます。「一体何を持ってきたの」、その方はアフリカやアジアなどのいろいろな国々には行っておられたのですが、日本は初めてでした。その場にカバンを持ってきて、彼は「実はこれだけど、これは出せない」、とそのものを見せてくれたのです。

これを渡したら日本の人は喜ぶだろうと思って彼が持ってきたそのお土産を見て、私は「なるほど」と肯きました。知的なケンブリッジの先生ですが、彼はその時、ただ仕事で訪れただけで、実は余り日本には興味がなかったんですね。これは渡すことはまずできないな。東京に着くと新宿に入って、新宿の高層のホテルに泊まって、すごく活気のある大都市を経験して、これは渡せない、そう思ったんですね。これを渡したら日本の方は喜ぶだろうと思って彼が英国から持ってきたものというのは、ごく普通の、どこにでも売っている髪を洗うシャンプーです。これをお土産にしたら日本の人は喜ぶだろう、彼はアフリカの国々を訪れた経験からそう思っていたのです。

よく付き合っているイギリス人のファミリーに、「昨日、日本のことをテレビでやっていたよ。日本の教育の現状について特集していたよ」と言われました。

「何時ごろ？ 何チャンネル？」

「何時頃で何チャンネル」

「ああ、あれは僕も見ただけど、あれは中国のことだよ」

「だから日本だろ」

「いやいや日本と中国は違うんだよ」

これはもうリタイアしていますが、アメリカのある大きな会社の、英国の法人のほぼトップで働いていた人のことばです。日本というのは中国の一部分だと思っていたんですね。何となくイメージとして、ほとんど一緒だと。だからチャイニーズかと言われることもあります。日本人はよく過度に反応して「いやいや、私はチャイニーズじゃない」という人がいますが、あれもおかしいですね。兄弟みたいな関係でしょう。アジアのいろいろな国とは、ほとんどファミリーだと言ってもいいような関係だと思いますが、そういう不思議な反応をする人もいます。しかし、正確に理解されているかということそんなことはない。お互いに理解が、なかなかできていないという気がいたします。

戦争の後遺症を超える創造力

メディアで報道されるものが、本当に一部でしかないということが一番驚いたのは、昭和天皇が亡くなった時です。昭和天皇が亡くなった時に、突然FAXが動き始めました。そして大使館から通知が入ったわけですが、入ってきたのは昭和天皇が亡くなられたから、しばらくの間は華やかなイベントや派手なことはしてはいけませんという通知でした。いろいろな機関に送られたのではないかと思います。その後、ショッキングな体験をしたわけですが。昭和天皇のお葬式に誰がいくかという論争が英国でおきました。最初はエリザベス女王が、いや女王がいく必要はないということのうち消されていくわけです。じゃ、プリンス・チャールズがいったらいいじゃないか。それも否定され、結局女王陛下の旦那さんのエジンバラ公がいかれたんじゃないかと思えます。いくことに決まった時に、いわゆる高級紙といわれるガーディアンやタイムズやオブザーバーやインディペンデントといった新聞ではなかったのですが、極めて大衆的なサンやスターと言われる、一般大衆が読むようなもの。大衆紙の中ではサンが一番読まれています。いわゆるタブロイド判と言われるものです。サンを作っているのはタイムズと同じ会社です。

びっくりしました。地下鉄の車中で私の向かい側に座る人が開いているサ

ンに書いてあったのですが、もしどうしても葬儀に出席するのであるならば、「横たわっている昭和天皇の顔に唾を吐きかけて来い」、そういう言葉が新聞に踊ったりしたんです。それぐらい、反応というものがあつたわけですが、恐らく日本では報じられなかったのではないかという気がします。それから、平成天皇になられて、平成天皇がヨーロッパを挨拶に回られました。ロンドンにもやって来られて、あるホテルでパーティが開かれた時に私も招待していただいたのですが、その後バッキンガム宮殿までの行進が行われました。その行進が行われた際に、これも恐らく報道されなかったのではないかと思います。それに抗議して、昔、捕虜になった経験のある人たちの組織が、その行進の途中で後ろを向いて抗議行動を行ったのです。

そういう中で、イギリスという国は何という国だと思われるかも知れませんが、先ほどのパールハーバー云々というだけではなく、いろいろな意味で戦争というのは、生き続けているわけであり。それはお互い、それぞれの国の持っている病んだり傷ついたりしている部分の後遺症であるわけですが、そういったものが実は報道される前段階で、様々な規制が行われているということ。私たちは全てを知っているわけではないわけで、限られたものの中からそういったものをイメージーションの力で、これからの社会のキーワードの1つはイメージーションという、想像する力が大切な力だと思えますが、そういった力でもって本当の世界というのはどうなんだろうかということ、良い方に考えていかなければいけないと思えます。

そして、先ほど申し上げましたように、嫌いな人、嫌な人を周りに増やすのではなくて、何とかその人を理解することはできないだろうかという力を身に付けていこうとしなければいけない。ですから、国際交流で皆さんが、海外からやってきた人たちに働きかけ、普遍的な力といったものを身に付けてもらうことによって、より日本という国を、日本人を理解し、愛してもらえるようになると共に、彼らが自分の国に帰って、その国の人たちも同じように理解することができるようになる。それが本来の国際交流であつて、国と国とが向き合つて握手をするようなものが国際交流ではないのだと私は思うのです。国と国、機関と機関が手を繋いで表面的な会話をして、よろしくというようなものが国際交流ではないのだということ。一人ひとりの生活の中に変化が生じて、そしてそのことによってお互いがより幸せになっていけるような力を獲得するというのが、国際交流ではないかというふうに思っています。

You are what you eat

ほぼ1年ぐらい前になりますが、次のような言葉に出会いました。

You are what you eat.

イギリスの言葉です。誰が言ったかは知りませんが、言い伝えられている言葉のようです。聞かれたことがある方もいらっしゃるかもしれませんが、このワン・センテンスに出会いまして私は、何度も何度も考えているわけがあります。これは一体どんなふうに捉えていったらいい言葉なのかなというふうに考えているのです。これを何度も何度も考えながら、メモを取りました。そのメモをちょっと読んでみます。

私は
私が食べたもので
できている。

私がリンゴを食べる。
私の食べたリンゴが
私の小指になる。

私が鯛を食べる。
私の食べた鯛が
私の耳となる。

私が胡瓜を食べる。
私の食べた胡瓜が
私の目となる。

私が食べなかったものは
1つとして
私になることはない。

当たり前のことなんです、私たちは生まれていろいろなものを食べたり飲んだりしていますが、それ以外のものが、つまり私が食べなかったものが私の体を作るということはないのです。食べた物が自分の体を作っている。当たり前のことです。私は私が食べたものでできている。それ以外のものが

自分の体に入ってくることはないわけです。食べたから、ある。つまり今、
食べようとしているこのリンゴは私なんです、ということでもあります。

私は
私が学んだものをよりどころとして
考える。

私が朔太郎を読む。
私が読んだ朔太郎が
私を詩人に変える。

私が文字を覚える。
私が覚えた文字が
私の言葉となってあの人に届く。

私が人間の悲しさを学ぶ。
私が知った悲しさで
私は他人の悲しさを知る。

私が学ばなかったものは
1つとして
私に私以外の人を愛する力を与えない。

私がもし
人の悪口を言うならば
その悪口を言う私こそが
まさしく私である。

私がもし
人を欺こうとするならば
その欺こうとする私こそが
まさしく私である。

私がもし
人の苦しみや悲しみに涙するならば
その涙する私こそが
まさしく私である。

私がもし
その涙を用いて人の心を弄ぼうとするならば
その弄ぼうとする私こそが
まさしく私である。

私がもし
自らの心の貧しさを恥じるならば
その恥じようとする私こそが
まさしく私である。

私がもし
他者に厳しくなし自らを許すことにのみ専らであるならば
その私こそが
まさしく私である。

私がもし
人を愛そうとするならば
その愛そうとする私こそが
まさしく私である。

私は
私が食べたもので
できている。

You are what you eat. というセンテンスに出会い、勝手にメモを取ったものでありますが、今私は、恐ろしいなという気がしています。生きていく過程において、私は私から逃れることはできないわけですが、吸収したもの、獲得したものが自分というものを作っている。国際交流や国際理解、あるい

は異文化間理解といったようなもの、それが獲得されたその体験者や学習者の中で、体内で、豊かなものとなって、そしてその人を創っていくことができればいいなと思うと同時に、せっかく日本にやってきて、日本でいろいろな体験をしたことによって、その人の心の中に大変な傷を残してしまい、そして人間を信じることができなくなったというようなことがないようにも願っています。(了)

ずし てるゆき
(英国国際教育研究所所長)